GEKKAN-WIEN Juni 2025 令和 7 年 6 月号 Nr. 423 平成元年創刊 gegründet 1989

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch
現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊 37 年目 Nr. 423
2025年6月号

Giuseppe Arcimboldo (1526–1593) Der Sommer 1563 datiert Lindenholz; 67 × 50,8 cm Wien, Kunsthistorisches Museum, Gemäldegalerie © KHM-Museumsverband

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 156

本年四月より筆者がパートタイムで勤務している東京科学大学（旧東京工業大学）と同大学での原子力教育について、三回に分けてご紹介したい。東京工業大学の起源は、明治十四年（一八八一年）に浅草区蔵前（現・台東区蔵前）に設立された「東京職工学校」にさかのぼる。明治政府が産業近代化を急ぐ中、実学重視の教育機関として創設された同校は、やがて「東京高等工業学校」へと改称され、大正一三年（一九二四年）にキャンパスを現在の大岡山に移し、昭和四年（一九二九年）には旧制「東京工業大学」として昇格した。戦後の学制改革を経て、昭和二十四年（一九四九年）には新制「東京工業大学」となり、日本の技術立国の礎を築く中核的な高等教育機関へと発展した。

東京工業大学は戦後日本の高度経済成長を支える技術者・研究者を数多く輩出し、特に工学・理学を中心とした専門教育と先端研究で国内外に名を馳せた。大岡山キャンパスは、工学・理学の枠を超えた学際的な研究拠点として整備され、イノベーションの温床となった。平成十二年（二〇〇〇年）には導電性高分子の研究でノーベル化学賞を受賞した白川英樹博士（元教授）、平成二十八年（二〇一六年）にはオートファジーの研究でノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典博士（当時特任教授、東京大学卒）ら、世界的な業績を残す研究者が在籍し、同大学の研究水準の高さを印象づけた。

二十一世紀に入り、東京工業大学は国際的な競争力強化と教育改革を加速。平成二十八年（二〇一六年）には我が国で初めて学部と大学院を一体化した「学院制」を導入し、学内の縦割り構造を打破。学生が柔軟に複数分野を学べる環境が整備され、理工系教育の新たなモデルケースとして国内外の注目を集めた。また、海外の有力大学との連携や、ベンチャー支援を通じた産学連携にも力を入れ、知の社会実装を意識した取り組みも進められてきた。

東京科学大学大岡山キャンパス本館
https://www.titech.ac.jp/public-relations/about/overview/history

令和六年（二〇二四年）十月には、東京工業大学は東京医科歯科大学と統合し、「東京科学大学」として新たな一歩を踏み出した。東工大が強みとする物質科学・情報科学と、医科歯科大が蓄積してきた生命医科学・臨床応用の知見が融合することで、これまでにない新たな学際領域の創出が期待されている。工学と医学という異なる系統の単科大学が対等に統合し、新大学を設立するという試みは、国内では極めて稀であり、学問の壁を越えた融合型大学としての先進的な意義をもつ。

東京科学大学は今後、生命科学と物質科学、健康と技術、人工知能と医療といった融合領域において、世界をリードする研究・教育拠点を目指す。その基盤には、東工大・医科歯科大それぞれが培ってきた百四十年を超える伝統と改革精神がある。技術と医療の連携が人類の課題解決に直結する現代において、東京科学大学の果たす役割はますます重要性を増していくと考えられる。伝統と革新を両立させた東京科学大学の歩みは、まさに技術立国・日本の未来像そのものを体現していると言えよう。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生きる動物(その一)を紹介したい。ウィーンはヨーロッパ有数の緑豊かな都市として知られ、市域のすぐ外縁に広がるラインツァー・ティアガルテンでは、アカシカやダマジカといった鹿が今も自由に暮らしている。この広大な自然保護区は、かつてハプスブルク家の狩猟場として整備された歴史があり、鹿は貴族の権威と娯楽の象徴であった。現在では、都市に隣接する森林の中で鹿が保護され、市民にとっては自然とのふれあいを楽しむ場となっている。さらに、ウィーン市内の中央墓地ではノロジカが墓石の間を歩く光景が知られ、またプラーター公園でも森林部に鹿が生息している。これらの場所では、鹿は都市の日常に溶け込む存在となっており、ウィーンの自然と都市文化の重なりを象徴している。

一方、京都近郊では、鹿はより宗教的・精神的な意味を帯びた存在として現れる。京都北部の鞍馬や貴船、また左京区の久多や右京区の水尾など、山林が迫る地域では、ニホンジカが日常的に姿を現す。古来より鹿は神の使いとされ、奈良の春日大社から賀茂神社へとつながる神鹿信仰の影響も京都に色濃く残っている。修験道の聖地である鞍馬山では、鹿は山の霊力を宿す動物として語られ、仏教や神道の信仰世界の中に位置づけられてきた。他方、過疎化が進む山村では、鹿による農作物被害が深刻化し、田畑の囲い込みや駆除が必要となる状況もある。神聖視されてきた鹿が、地域によっては「害獣」として扱われるという複雑な現実が横たわっている。

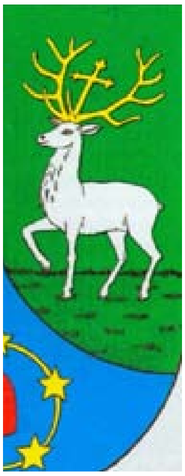
このように、ウィーンと京都では、それぞれ異なる文化的背景のもとで鹿が存在してきたが、近年では共通の課題も見られる。いずれも都市の周縁部における鹿の生息域と人間活動との境界が曖昧になり、農作物への被害や生態系バランスの崩れが懸念されている。また、観光や自然保護といった現代的価値観のなかで、鹿をどのように位置づけ、ともに暮らすかという問いが改めて投げかけられている。鹿の姿は、単なる自然の一部ではなく、都市と人間の歴史、信仰、生活のあり方を映し出す鏡である。ウィーンと京都における鹿の存在は、私たちに自然との関係の再構築を促しているように思われる。

余談であるが、筆者がウィーン在住時はプラーター公園内で鹿を目撃した。確かに都市の日常に溶け込む存在であった。京都では鞍馬訪問時に鹿を見かけた。京大での同僚の松ヶ崎に住む知人の名誉教授の奥さんからのハガキには「主人は鹿との戦いです」とあったそうである。今月も両地に生きる動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ラインツァー・ティアガルテンの鹿の写真を掲載させていただく。

Lainzer Tiergarten: どんとこいウィーン

■ 杉本純
東京科学大学特任教授
元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■

© E.St. stadtwildtiere.at


ウィーン２区

ウィーン９区

ウィーン 15 区

ウィーン 18 区

ウィーン 22 区